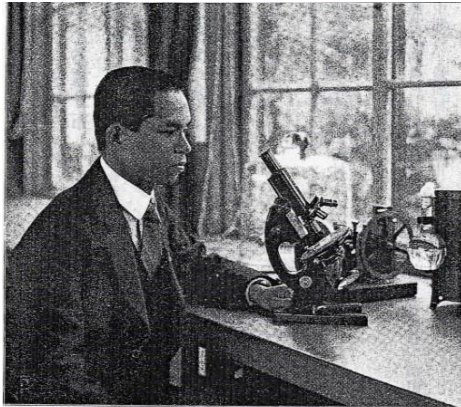


# 佐藤清明資料保存会会報

No. 2



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会  
里庄町立図書館

2019.3.31.

## 会報第2号 もくじ

1. 会長あいさつ	会長 加藤 泰久	1
2. 巻頭論考 佐藤清明と牧野富太郎	顧問 岡本泰典	2
3. 清明を読む会記録「佐藤清明先生の思い出」	渡辺義行	6
4. アーカイブス2「桂氏を追憶して」	佐藤清明	16
5. アーカイブス3「(叙勲〔S.55.11.3. 勲五等 双光旭日章〕にかかる功績調書)」		17
6. 佐藤清明資料の整理状況		19
7. 編集後記		20

表紙写真：第六高等学校理科助手時代の佐藤清明（20代）

## あいさつ

平成も今年で終わりを迎えます。佐藤清明先生は明治 38 年(1905 年)に里庄町里見でお生まれになりました。明治、大正、昭和、平成を通じて里庄町でお暮らしになり 94 歳で亡くなりました。そして時代は新しい元号に変わろうとしています。今年は清明先生のご生誕から 114 年目を迎えます。昨年から資料保存会が発足しましたが、保存会発足まで短い期間でネットワークが広がり、保存会の皆さんが積極的に調査研究、図書館における展示や資料保存活動に取り組まれている姿に、私は何か見えない力を感じます。これも、生涯を通して自然を敬う気持ちや探求心を持ち、幅広い多くの人と温かい交流を続けられた、清明先生の大きな魅力なのかもしれません。

保存会に参加されている方は、いろいろな分野において造詣が深く、研究内容も専門性が高いものですが、皆さん和気あいあいと熱心に活動されており、町の新しい文化の息吹を感じます。

また、昨年は清明先生と親交が深かった、高橋小太郎氏のご息女である高橋寿美江様から、「木之子島物語」という題名の本をご寄贈いただきました。その内容から当時の神秘的な自然、豊かな瀬戸内の情景を思い浮かべ、また社会背景を知ることができます。

私たちは明治以降、多くのものを発明したり、生み出したりして生活は便利で豊かになったという感じがします。しかし同時に、多くの大切な自然や文化を失いつつあるということを、清明先生の研究や資料の保存を進める中で知ることになると思います。その貴重なものを可能な限り、後世に伝えていくことも私たちの役割の一つです。

保存会は今後 10 年計画で調査研究や保存活動に取り組むこととしており、一步一步着実に進めて行く必要があります。どうか、会員並びに町民の皆様のご理解とご協力をいただきますよう、よろしく願いいたします。

平成 31 年 3 月

佐藤清明資料保存会会長  
里庄町長 加藤 泰久

## 佐藤清明と牧野富太郎

顧問 岡本泰典

筆者と佐藤清明との関わりは、2010年の秋、倉敷市立自然史博物館学芸員の江田伸司氏から「牧野富太郎から佐藤に宛てた手紙を読んでみませんか」と勧められたのがきっかけであった。牧野富太郎（1862–1957）といえば、「日本の植物学の父」と称され、1,500種を超える植物を発見・記載した業績と、波乱に満ちた生涯とで有名な土佐（高知県）出身の植物学者である。それまで筆者は、植物研究者としての佐藤の名は知っていたが、詳しい経歴や、まして牧野との交流があったことなど全く知らなかった。迷わず引き受け、書簡を読み解き、関連資料をあたり、にわか勉強でまとめた調査報告は、倉敷市立自然史博物館友の会の会報『しぜんしくらしき』の第81～84号に掲載された。各書簡の詳しい内容はそちらを参照していただくとして、本稿では佐藤と牧野との交流を概観し、若干の私見を付記することで、今後の「清明研究」の叩き台に供することを目的とする。

まず、佐藤と牧野との交流はどのように始まったのであろうか。むろん、植物に関心があった佐藤は早くから牧野の名を知っていたであろうが、直接的な交流の始まりは、最古の書簡の日付である1930年（昭和5年）6月4日以前であることは確かである。この年、佐藤は25歳、牧野は68歳であった。

佐藤の叙勲を報じた1980年（昭和55年）12月17日の『清心なでしこ新聞』（清心女子高等学校新聞部）によれば、佐藤が文検（中等教員免許）博物科に合格した際に牧野との出会いがあり、その後の人生を決定づけたという。佐藤の文検合格は大正13年（1924）7月26日、佐藤が19歳のときであり、試験会場は東京であった。しかし、牧野は1931年（昭和6年）12月4日付の佐藤宛書簡で、同年11月3日に佐藤が牧野宅を訪問したときのことを「初めて拝眉を得て」つまり初対面であると記している。1924年の出会いとは、一対一の場ではなく、牧野も佐藤の存在を認識していなかったのかもしれない。いずれにせよ、20歳そこそこの青年にとって、高名な植物学者との出会いが大きな刺激となったことは容易に想像できる。

佐藤と牧野との交流が始まった頃、牧野は東京帝国大学植物学教室の講師の地位にあった。周知の通り、牧野は学歴のないことに加えて主任教授との軋轢もあり、講師に就任したのは1912年（明治45年）、50歳のときであった。また、牧野の植物分類学者としての

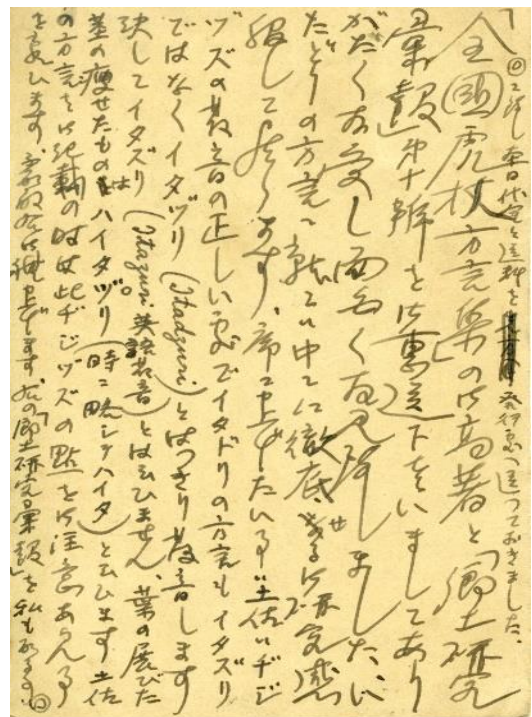


牧野富太郎（『牧野植物学全集第1巻』1934より）

仕事、つまり新種の発見・記載が最も盛んだったのは明治から大正期にかけてで、昭和に入ってから、『牧野植物学全集』の刊行、『本草綱目』の校訂など、長年の研究の集大成といえる活動に移行していた。これらの延長線上に、かの名高い『牧野植物図鑑』の刊行（1940年）もなされている。佐藤が出会い、教えを乞うた頃の牧野は、すでに学界の権威者であったが、まだ若く経験も浅い佐藤に対して懇切に対応していた様子は、書簡の内容からもありありと伝わってくる。

さて、牧野の佐藤宛書簡 11 通（ほかに年賀状 4 通）のうち、6 通が佐藤の植物方言研究に直接・間接に関わるものである。昭和初期、佐藤は自然史・民俗学双方の境界領域といえる「動植物の方言」を大きな研究テーマの一つとしていた。佐藤の研究した植物方言で筆者が把握しているものには、イタドリ・スマレ・ハコベ・ジャガイモ・オオバコがあり、1931年には『岡山県植物方言辞典』という冊子も刊行している。牧野も植物方言には深い関心を寄せており、書簡中では佐藤の研究に対して激励や助言を送り、時には不備を指摘したりして、研究のさらなる進展を促している。

ずっと後年の1987年（昭和62年）、佐藤は『岡山人俗』第174号に桂又三郎追悼文を寄稿している。それによると、1930年の岡山県生物採集動員（陸軍特別大演習のために来岡する昭和天皇の天覧に供するため、県下の児童生徒を動員して行った採集活動）に際して指導に回るうち、生物方言の収集に興味を持ち始めたという。一方、1930年に『植物研究雑誌』上に発表した論考「岡山県ニ於ケルいたどりノ方言分布」では、同誌において牧野が植物の方言調査が進んでいない現状を嘆き、学者の怠慢を一喝したことが刺激となったと述べている。以上、佐藤自身の記述にもやや揺れがあるが、特定の出来事が契機というよりも、昭和初期の一連の経験の中から、徐々に植物方言への関心が育ってきたというのが真相であろう。そして佐藤の研究対象は動植物に限定されず、遊戯や妖怪の名称といった民俗学分野にも及んでいたことは、本誌前号で木下浩氏が指摘する通りであり、当時の佐藤は「方言研究」という大きな構想を抱いていたと考えられるのである。



1931年5月13日付の牧野書簡

佐藤は、牧野が発行する『植物研究雑誌』に、前出の「岡山県ニ於ケルいたどり方言ノ分布」と「全国はこべ方言集」の2編の論考を寄稿している。同誌は現在も製薬会社のツムラが刊行する植物学の専門雑誌として続いているが、当時は牧野の個人雑誌という性格が強く、掲載記事も狭義の植物学に限定されず、方言の調査報告といった人文的な話題も積極的に受け入れていた、大らかな時代であった。佐藤は前者の論考において、岡山県各地のイタドリ方言を比較し、北部よりも南部のほうが単語が短い、南部の吉備・浅口・児島地域において最も多様性が高いといった傾向を報告している。



またこれとは別に、佐藤は「全国イタドリ方言集」という著作を牧野に贈呈している。それに対して牧野は1931年5月13日付の書簡で、佐藤が土佐でのイタドリの方言を「いたずり」と表記したことに対し、正しくは「いたづり」であり、土佐では「ず・づ」の違いを区別して発音する、と注意を促しており、土佐人としての牧野のこだわりが感じられ興味深い。この一件は佐藤もよほど印象に残ったとみえて、後年の著作「神秘の方言イタドリ考」でもこの話を披露している。

昭和初期の佐藤は、自然史や民俗学に幅広く関心を寄せ、牧野だけでなく、大賀一郎（植物学者）、飯柴永吉（植物学者）、柳田国男（民俗学者）、門前弘多（昆虫学者）、川村清一（菌類学者）、川村多実二（動物学者）、南方熊楠（博物学者）といった、驚くほど多彩な研究者たちとの交流を行っていた。おそらく、当時20代から30代前半だった佐藤は、知的好奇心と若い感性の赴くままに各方面にアンテナを張り巡らせ、情報の収集と蓄積に努め、自らの進むべき道を模索する過程にあったのであろう。植物方言の研究も、植物自体への関心は当然として、自身が手掛ける方言研究の一環としてもなされたものである可能性が高い。イタドリの方言報告を、牧野だけでなく柳田国男にも送付しているのは、まさにその証であろう。

その後、おそらく昭和10年代を転機として、佐藤は方言研究という民俗学分野から離れ、戦後はその研究を自然史分野に特化させていったと考えられる。植物方言についても、戦後にはまとまった著作は確認されず、佐藤の次なる仕事は、植物を始めとする県内の天然記念物の調査・保存活動へと移っていく。牧野からの個人的な書簡は、1935年（昭和10年）10月11日の礼状が最後であるが、1937年（昭和12年）の年賀状や、1939年（昭和14年）の牧野の喜寿記念祝賀会の礼状（印刷物）があり、1974年（昭和49年）の牧野の銅像建立に際して佐藤が寄付金を拠出していることからみて、その後も牧野との交流は続き、敬愛の念は薄れることはなかったと思われる。

さらに近年、佐藤と牧野の密接な交流の証拠が新たに発見された。佐藤は生前、自身の採集や交換によって約1万点の植物標本を収集しており、没後の1999年（平成11年）に倉敷市立自然史博物館に寄贈された。まだ一部しか整理がなされていないが、戦前から戦後にかけての全国各地の標本を含んだ貴重なコレクションである。筆者はこの標本を閲覧する過程で、牧野が採集した50点の竹笹類標本を見出した。詳細は倉敷市立自然史博物館友の会の会報で紹介する予定であるが、ラベルの筆跡や採集年月日・採集地のデータから牧野の採集品であることは確定している。経緯は不明であるが、牧野が佐藤に個人的に



佐藤植物コレクションに含まれる牧野標本  
（倉敷市立自然史博物館所蔵）



「ケネザサ」の標本ラベル

譲った可能性が高く、50点もの標本という「気前の良さ」は、牧野が佐藤に寄せる期待の大きさの指標と解釈できるかもしれない。

ここで「牧野との関わり」からは少し脱線するが、佐藤の植物研究の傾向にも触れておきたい。佐藤は植物を主要な研究対象としつつも、実のところ植物分類学や植物生態学の原著論文といった、いわば「純粹植物学」に属する著作は残していない。佐藤の植物学に関する業績は、戦前の植物方言研究、膨大な植物標本の収集、戦後の植物を始めとする天然記念物の調査と保全活動、そして植物を含む自然史分野の啓蒙的著作などに集約されるのである。そして、そこには佐藤自身の学問的志向が反映されているように思われる。

つまり、佐藤は植物に軸足を置きつつ、特定分野の専門家というよりも、広く自然全般、さらには人文分野までも網羅し、該博な知識をもって自然と人間を語る「博物学者」を目指し、かつ実践したのであろう。牧野も、その学識は決して植物分類学の世界に限定されることなく、和漢の古典籍や各地の植物方言などに通暁し、著述にも存分に活かされている。想像ではあるが、佐藤は牧野をはじめとする多くの研究者と接し、各分野と自らの関心とのすり合わせ、試行錯誤を重ねる中で、最終的に自然史分野に研究を特化し、その中でもスペシャリストよりもジェネラリストへの道を選択したのではないかと、思われるのである。その際、10代の頃から既に発揮されていた文才が大きな武器になったことも間違いない。

当時、佐藤が何を考え、どのような構想のもとに研究を進め、そしていかなる事情から「自然史分野のジェネラリスト」へと進んだのか。佐藤自身の日記や、当時をつづった回顧録などが未発見の現状では、その胸中を推し量ることは難しい。いずれにせよ、博物学者としての出発点にあった佐藤に多大な影響を及ぼした人物の一人として、牧野の名を欠かすことはできないであろう。その影響とは、具体的にどのようなものであり、「博物学者・佐藤清明」の誕生にどう寄与したのか。すべては、今後の大きな研究課題として残されている。

## 佐藤清明先生の思い出

2018.12.8 渡邊義行氏 述

### 1. 先生との出会い

佐藤先生は、昭和 12 年から昭和 62 年まで 50 年間、清心女子高等学校に勤務されました。清心女子高等学校の前身の学校に 6 年間勤務されたので、合計 56 年間勤務されたこととなります。

私は、生物科の教師として、先生が 61 歳の昭和 42 年から一緒に勤務させていただきました。

### 2. 学校での様子



先生のヘアースタイルはいつも、髪を短くされ、外に出かけるときはよく烏打帽をかぶっていらしたです。学校でのお姿は、スーツやブレザーにネクタイを締め、その上に白衣を着られていることが多かったと思います。お声はとても大きく、大変お元気でした。

佐藤先生はとても、英語がお上手で外国人のシスターたちと廊下で流ちょうに英語でしゃべられている姿を拝見して、すごいなあと思いました。

佐藤先生は、お弁当をお持ちでいらっしゃいました。ところが、佐藤先生は 11 時を過ぎた頃から、決まって仰ることがあるんですよ。「11 時を回ったからそろそろお昼にしましょうか」と言われるんです。それで、まことにおいしそうに食べられる。それはね、早くお腹が空いて、美味しく召し上がられるということは、鴨方駅まで歩かれて、そこから電車に乗って中庄まで行ってそこからまたバスで学校までいかれる。大分運動されていますもんね。そういう事だろうと思います。

はい、それからね、お元気なという事を私を感じましたことは何しろ、清心でいっぱい授業されるんですけどね、多い時は、週に 24 時間くらい授業されていたんですけども、さらに他の学校にも授業や講義にお出かけになっておられました。これはもう、すごいことだなと思うんです。さらに調査とかいろいろございますからね、休みでもどういう風にされていたのかも大変な仕事量じゃなかったのかな、と思っております。ま、お元気なんです。

それから、思いつくことを申し上げておりますが、先生はユーモアのセンスがおありでした。ひとつ例をあげましょう。例えば職員会議で何か話し合った時に A 案と B 案が出てどっちも譲らずになかなかうまくまとまらない、そういう時に先生は手を上げて言われるのに「そりゃ、A 案、B 案それぞれ良いところありますけどな、これから長う長う話をして



みても、まとまりませんからどねんかなりませんか」と言われる。

そしたら、その時にチャイムが鳴ったんですよ、キンコンカンコン。そしたら先生「誰がために鐘は鳴る、チャイムも鳴ったことだし、ぼつぼつ結論を出しましょう。A案でいきましょう」とか言われると、今までぎすぎすしていたその場の雰囲気が一と溶けて、司会者が「佐藤先生が今こう言って下さいましたけど、御異議ありませんか」と言っても、だれも反対しない、すーっと決まるんです。これはやはり、先生に対する信頼と尊敬があるからこういうことになったのかなと私は思います。

はい、それから、学校の方では授業の他に色々な係を分担しております。その中で佐藤先生が係をしてしてくださったこと、その辺をちょっとお話しさせていただきます。今3つ思い当たるんですがね。

一つは同窓会の世話・顧問。それはですね、30年・40年もう清心女子高等学校ができずーっと先生がお一人で生物を教えてくださいましたわけですから、卒業生は全員先生の顔がわかるんです。そうしましたらね、同窓会なんて色々な所でありますけれども、先生が居て下さったら卒業生みんな顔がわかりますから、ほんと安心して非常にうまい具合にいくというわけで、同窓会の係をして下さっていました。

それから、ちょっとあんまり色が良くないんですけど、一番上のカラーの紙(左の写真)



を見てください。これ、実は佐藤先生の作品なんです。何かの時に先生のプロフィールを見ますとご趣味の欄に「生け花」と書いてありました。「華道」と書いてあったかな。かっこして池坊流とありました。卒業式と入学式にはいつもこういう花を活着てくださった。見てください。大きな備前焼の壺に校内にあります松を切ってこられて梅であったり桜であったり、これは桜じゃないかと思うんですか、椿であったり、そういうものを切ってこられてそれで後に花屋さんで買ってこられた花を足されました。これがあるとぐっと引き立つんですよ。会場の空気が上がってきますね。そういうものをみんな見てきたわけです。これはね、昭和56年の4月8日です。だから、入学式の前の日にこれを活着てくださったんだと思います。

それからね、先生でなければできない係があったんです。それは、夏休みに希望者を集めて大山登山と言うのをしておりました。これは、佐藤先生でなければ、生徒の指導はできませんね。えーまあこんなとこです。先生は昭和17年から30年以上にわたり大山の登山を計画した、と言っておられました。先生は生徒の引率もして下さったし、ご自分の研究のためにも行かれる、他のグループとも行かれる。大山登山は80回以上とも言われていましたね。もうほんとに何度もいかれてご研究もなさったようです。

それから、あとね、空き時間がありましたら、校庭に出られましてね、そこで、生徒たちに野外観察をさせる時の教材研究ですね、どういうことをしたら良いか、どんなものを

生徒に見せれば良いか等研究されていました。

まあそういうことですがそれから、紀要といいましてね、学校で教職員が研究した論文とかレポートとかそういうものをまとめたものを学校の方で数年に一度のペースで出していました。これに、いつも佐藤先生は立派な論文を寄せてくださっていました。

それじゃすみません。授業のことをお話します。あの佐藤先生は高等学校の生物を受け持っておられました。生物教室に入りましたら教室の窓際に棚がありますが、そこに佐藤先生牛乳瓶をずらーと並べられまして、草花を入れておられるんですな。名前をつけて。春だと春の七草、秋だと秋の七草だとか生徒に見えるように置かれていました。

### 3. 授業・講義

授業ですが先生の授業はちょっと特徴がありまして、あの模造紙ご存知ですかね、白くしておおきいのありますでしょう。あれに図をかかれるんですよ。マジックインキで描かれます。例えば耳の授業だと耳はどうやって聞こえるかだとか、耳の構造だとか仕組みですよ、それをきれいに描かれ、それを黒板やサイドボードに貼られます。参考にされる本は日本の本ではないんですよ、「Biology」というアメリカの教科書です。日本でいったら短大か大学の教養課程ぐらいのレベルの物を参考にして生徒にわかりやすく描かれていました。実物がありませんので、見て頂くことができませんけれども。

授業は 50 分ですけども、半分ぐらいの時間を使って説明される。これがまた、さきほども申し上げましたが、大きな声で講談でも聞いているんじゃないかという声なんです。そりゃあもう説得力があります。その間生徒はノートをしてはいけない、とにかく聞きなさい。それをびしーっと徹底されるんですよ。もう圧倒されるくらいですよ。

その次にね、それが終わったら今度はノート、ノートの時間。これになったら、もうどこに行ってもいいから掛図の 3 枚の中でこれとこれは全員描きなさい、3 枚目は、時間がある人は描きなさい。そういうふうなかたちで先生は机間巡視をされ、机をずっと回って行かれて質問を受けたり色々されます。

それからね、それが終わりましたら先生よくね、視聴覚教材と言いましょか、あのクラスライドや 8 ミリカメラでとって映写機で写すのがありますね。なされたことが御有りの方があるんじゃないでしょうかね。そういうのを作って、生徒に見せてくださった。これは生徒にとっても楽しい時間ですよ。そういうようなことで興味付けをしてくださっていました。

その中で一つ二つ、どんなフィルムがあったかという、私が思い出しますのは「アオサギとカラスのケンカ」それがね、清心の山の丘と言うのは、あれは元々海だったらいいんですよ。従って清心がある丘と言うのはその頃島だった。島という事はその辺に船が行き来していたんですね。その船を修理するところだったらいいんです。細工をするから細工山という名前がついていまして、現在では細工の字が変わって才能の才に公という字で才公山というんですけど、現在は島であったころの植生というのは、ほとんど残っていません。でも松は結構あります。その松にアオサギが巣を作るんですよ。今はどうかわかりませんが、私達が居る頃には毎年アオサギが巣を作っていました。

アオサギ、岡山県内で一番大きなサギだと思います。アオサギといっても青じゃないんです。灰色と青が混ざったようなそんな鳥なんです。それが卵を産んでそして温めています。そうするとハシブトガラスがやって来ます。カラスは、頭がいいですね、集団で来ま

す。そこで襲ってきますからアオサギが防戦して空中でケンカをします。そしたら、別のカラスがすーっと行って巣の中にある卵を取ってしまう。そういうのを先生は8ミリで撮って生徒に見せたりしておられましたね。

あのそれからもうひとつだけ、例をあげましょうか、梅雨になりましたら、小川から亀がこのこやってまいります。校庭まで。何しにくるんでしょうなあ。それでお分かりだと思います。南の斜面に行きますと、穴を掘ります、卵を産むんです。それで砂をかけて埋めて帰っていきます。太陽の熱で自然と卵がかえるんでしょうなあ。そういう所を上手に撮られていました。亀は後ろ脚だけで穴を掘りますが、なかなかうまく掘れません。空振り空振り。そういう風な営みも記録をされておられました。

よくそういう自然に対して先生がは、「これだけの校庭のスペースで起こったことに関心をもっただけでもドクター論文が書けるよ」とおっしゃっていました。つまり、もっと身近なところで勉強しなさいよ、という事を常々私達若い者におっしゃっていました。それで、佐藤先生は生徒たちが自然に関心を持つように指導してくださっていたんです。数か月前に私ある同窓会に行きました。そうしたら、ある同窓生がこういうことを言うんですよ。団地に住んでいてその奥さんたちとウォーキングにいくんですね。そうしたら季節季節の花が咲いているのを「あっこれこれ」と言って名前を言ったら奥さんたちが「あなた、植物の学校に行ったの?」と言われたと言ってましたね。佐藤先生の授業でもらったことが、ひとりでの身についているんですということらしいです。すごいなあと思ひましてね、聞いたことをごぞいました。

はい、清心の授業の事はそれくらいにしまして、先生は他の学校に授業に行かれていますという事は前に申しあげましたが、岡山大学の農学部に行かれています。資料がちょっと焼けているんですが、「有用植物分類学」という講座を開講されていました。先生の講座です。植物の分類学ですからね、本当でしたらもうこのまま2番にありますリストを持ってね、これですこれですという話が多いと思うんですよ。ところが先生のはちがうんです。これも私も一緒に行かせていただいたんですけれども、この丸の1になります。こういうことですね。

吉備路を歩いた時なんですけれども、吉備路でこういうふうな歴史的な背景があるんだよという、時には歴史だけでなく文化だとかいろんな説明がございまして、そういうことを一式説明なさってから、それがすんでから始めてそれじゃあ採集に出かけようかということなんです。最初に申し上げなくてははいけませんでしたが・・・。大学でももちろん授業がありますが、何回かは外に出て実際に見るということです。土曜日の午後に行われていたもんですから、私も同行させていただいていたんです。とにかく幅の広い内容の講義や授業をしておられました。

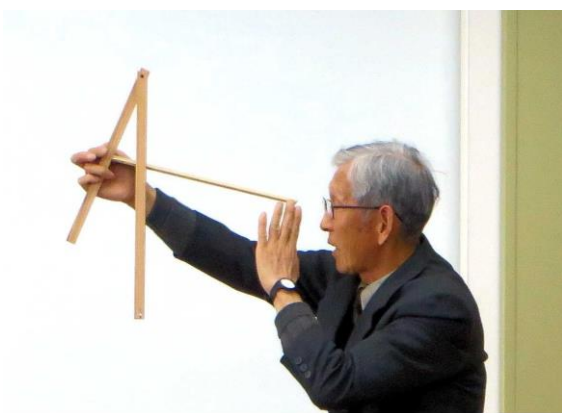
#### 4. フィールドでのご研究

続きましてね、先生はその教育領域ももちろんですけども、申し上げるまでもなくご研究の方でね、いろんな功績を残されたわけですね。私が清心女子高等学校にお世話になっていたころですね、天然記念物の緊急調査とかいうのがありまして岡山県内の各市町村の調査なさるようなことがよくありました。

先生は車の運転をなさいません。したがって調査にお出かけになる時はいろんな人といっしょに協力しながら、例えば市町村の教育委員会の協力があつたり、それから研究お仲

間の人と一緒に行ったりそれか私ももう何10回、100回近いんでしょうか御伴したことがございます。その調査においてになります時は、調査の中に神社とかそれからお寺さん、そういうところにも結構行くことができました。私はねあのー感心しておりましたのはお寺やお宮に行かれるんですけど、調査の前に神仏に拝礼をされます。それから拝礼が終わられましたら今度は社務所ですかねそういうところにちゃんと挨拶に行かれます。それから、調査されます。いつもそうされていたと思います。

そして調査ですからね、カメラで写真を撮ったりいろいろされるんですね。その中で広く樹木とかそういうものを調査なさいました時にデータを記録されます。ちょっと今日の資料の○の3。最後の物です。樹木の測定と書いております。これはあの、高校生用の実習書の方ですのであまりよくないかもしれないですけどご覧ください。この実習書の上のほうにね、樹木の測定実習と書いてありまして、目通り、根回り、樹高、そういったものを記録するとかいてありますね。いくつかの樹木を、比較するならデータが無くてはい



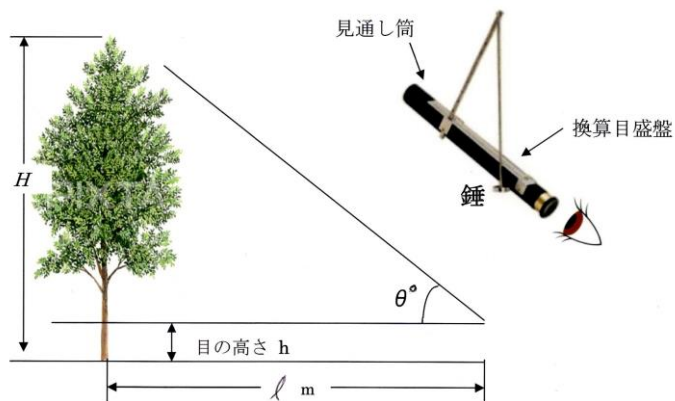
渡辺先生、樹高測定のパーズをとる

けません。

目通りと言いますのは地上、目の高さということなので通常は1.5メートルで記録をしています。1.5mのところでは木の周りをはかるというわけでございます。根周りは根元の周囲の長さ、樹高はワイゼーの測高器によって測定するんです。ワイゼーの測高器を実に能率よくと言いますか、テキパキとですね使われて木の高さを計るのに、これはお使いになった方いらっしゃるかな。ああおられない。実は、実物をもって

くれればよかったんですが、実物が私の手元にはないものですから大変申し訳ございません。こんな機械がありまして。これで覗いて木の高さを測るんです。ちょっと原理だけどういう原理かいうのをお話しします。あのこんなに大きいことはないんですよこの半分くらいです。

(資料) ワイゼー樹高測定器



$$\text{樹高 } H \text{ m} = l \text{ m} \times \tan \theta + \text{観測者の目の高さ } h \text{ m}$$

※ 市販のワイゼー式樹高測定器の例では、見通し筒の長さ23cmで、携帯しやすいサイズになっている。 $l = 10\text{m}$ と決めて、長さ10mのロープがセットになっているので、ロープを使って、樹高を測りたい樹木の幹から10mの位置に立ち、計算はしないで、錘の棒と交わった点の換算目盛から「目の位置からの高さ」を読み、「地面から目の位置までの高さ」を加えて樹高とする。

どっかに大きい木があるとしますね。木をこうやっての覗くんです。その時に樹木までの距離をここに取ります遠方にあります、近くにありますが、そしてこうやって覗いて上を見るわけです。木が高いときはこうなりますから、この距離が長くなります。低いときはこうなりますからここが短くなりますね。本当はここにおもりが付いています。ここを読むことによって、樹の高さをはかるということになります。ただし目で覗いておりますからここからですから実際はここまでの高さをプラスしなければなりません。これがワイゼーの測高器というものです。ただ、今はおそらくもっと良い、正確に簡単に測れる機械があるんじゃないかなって思いますがちょっと私はその辺の事情を心得ておりませんね。そういうことでございます。はいそうやって記録をされました。それで先生そうやって調査をされるんですよ。

それでね、あの先生すごい方ですよ、調査に行ってきたら次の日にはもうレポートができています。これがすごい。よく言われましたのは、「ちょっとこれ間違いないか見て下さい」って言われる。無理です。何をおっしゃるんでしょうか、それでも先生よくまあやっぱり、これ癖なんですよ。先生ここにマルが2つありますよ1つでいいんですよ」とかね。そのくらいしか言えないんですけど、それを言ったらやたらご機嫌がいいんです。「ありがとう。ありがとう。もう疲れとったからミスがあったかもしれんな」と言われるんです。

はいまああのそこでねー、調査に行ったらまたいろいろ面白いこともございますよ。一つだけ例を挙げてみましょうか、調査に行ったときにそうですねいろんな所に行かせてもらいました。

備前市の鶴見という所に住吉島という小さな島があります。海ですよ、海があつてここに海岸がある。島は小さいんでねえ周囲が400メートルほどしかありません。ところが岸からすぐそばにあるんですが、そこまで歩いて行くわけでいけませんね。で先生と私と調査にいったんです。すぐそばに見えたんですけど行けません。そしたら鶴見漁港ですか漁船が入ったりする港があった。そうした時にどうしようかといって先生ね、いきなりその漁師さんに声をかけてね。

「お兄さんお兄さん、その島に行きてえんだけど、定期船があるかな」と言われる。

お兄さんがね「あそこは無人島じゃけんそんなのあるもんか」言われて。

(佐藤)「うーんこまったな、何とかならんか。」

(漁師のお兄さん)「誰かに頼んで運んでもらうしかねーなー」

(佐)「あんたちょっと行ってくれんか」ってと言われて

(漁)「わしゃあこれからあ仕事じゃけえそんなことできん。」

(佐)「なんとかしてくれんかなあ。私は、里庄の遠くから来たんじゃからなんとかしてくれえ。」

(漁)「そしたらまあ、わしはこれから仕事だけど、わしの弟は今日非番だからゆうてみようか」いうことで話がまとまってその島まで漁船で連れていってもらった。10分ほどで帰ってきましたがね。



その島には島の真ん中に神社がある住吉神社というのがあります。住吉島に住吉神社がある。住吉神社と言いますのは、漁をする神様です。航海の神様なんです。そういう神様なんですね、でそこは、神様の島ですから皆さん伐採したりそういうことをずーっとしてないんです。自然の樹林があるんです。だからそこが天然記念物になっているわけですね。岡山県指定天然記念物という石柱がありました。中に入って荒らすこともできませんし、ちょっと今の入り口のへんからずっと中を見たんですが、そういうすごい世界ですよ。もうね、手が入ってないんですから自然のままなんです。バベ、あっぱべは方言ですか、ウバメガシがずーっと覆ってます。それからトベラ、モッコク、椿。そういったものがぐわーっと覆っています。あったかい地方ですね。

そしてその下にはなんとね、こういうものがいっぱい（ヒトツバを袋から出す）これご存知でしょうか、ちょろっとでてますね。これは住吉島のものじゃございません。大丈夫です。住吉島から持って帰ったらえらいことになります。これは私の家の庭にはえていたものです。葉の裏に胞子があつてねそれで増えて行きます。シダの仲間でございます。



はいっ 名前はヒトツバでございます。これがヒトツバです。ここから1本しか出ない葉が、これがぎっしりです。

私は本当にそういうところは見たことがなかったのです。いわゆるその教科書的には、図を見たことはございます。暖かい地方の樹林でございます。住吉の樹林でございます。そういうものは写真で見たことはありますけどまさにそれが住吉樹林です。その他にいろいろ回しましてね。運転手をしながら色々。

（生宗） それ（ヒトツバ）を、回させてください

そういう事とかいろんな事がありますね。私も先生の御伴をしていろいろお聞きするんですよ。それでメモしますよね、たまりましてね、それでもう、私だけがお聞きしてほっておくのもったいないんで、なんとかできないかと考えまして冊子にまとめようと思ひまして、佐藤先生からお聞きしたことをここにまとめました。

全部はできませんから国指定と県指定だけ、両方でその当時41あったと思うんです。まとめてこの冊子を取りあえず200部作ったんです。そして学校の生物教室に置いといたのです。必要な人は持って帰ってくださいということで、一学期したらもうなくなっていました。まあ200冊のうちの何冊かは使われて、これを見てね現地に行ってくれた人がいるかなと思います。

本当にあの勉強になりました。先生といっしょに行ったら、生き字引で本当にいろんなことを知つとられます。有難い思い出がたくさんあります

（生宗） 先生それ（『岡山県の天然記念物1』）もまわしてください。





生徒のための自然観察資料集No.3 渡辺義行著 1993

次にいきます。それじゃさつき漁師さんとのかけあいをも申しましたけれども、みなさんこれ余談になって申し訳ないんですが、『鶴瓶の家族に乾杯』という番組がNHKにありません？（あります あります）NHKでしたかな。あの雰囲気です。（笑い）それが一番びったりです。本当に私はあの『家族に乾杯』が出てきたら私は佐藤先生をイメージしてしまいます。本当にそうなんです。すぐ仲良くなれますよ。あのどこでしたか落合町でしたか、あそこ行った時、昼にお弁当を持っていかなかったんです。前日に、どこかで買えるだろうということで、あえて持っていかなかった。そうしたらね、今でしたらそれはどこでもコンビニがあったりスーパーがあったりしますでしょ。ないんですよ。けっこう調査の時お弁当が無かったら困りますでしょ。

そうこうしていると、先生がね、「じゃあちょっとこの辺で泊まったことがある旅館があるから行ってみよう」と言われて、旅館の中に入っていていかれました。おかみさんが出てきました。

- (佐藤) 「すまんけどお昼ご飯2人前作って下せえ。」と言われてもおかみさんも困りますわな。  
(おかみさん) 「うちは食堂じゃないで旅館じゃからな昼はできません」  
(佐) 「そこをなんとかしてくれんかな。ここは泊まったことがあるんだよね一エエ旅館じゃったなあ」そういうことをおっしゃって結局いいようにいくんですね。  
(佐) 「残りもんでもええから何かしてくれえ」いうて  
(お) 「ほんならもうしょうがねえ。その代わりご飯これから炊くから40分くらいかかるから」  
いわれて

佐藤先生ちらっと時計を見て「そういうけど渡辺君、15分くらいでできるで」いうて言われました。たしかにその時出たのは残り物でした。2つお膳が出ましたけど中のメインディッシュが全然違うようでした。まあそんなことでございます。

## 5. 晩年の先生

最後にですね、ちょっと晩年の先生、ちょっとだけ話をさせていただきます。

ご退職になります頃に、私は、中学校と高校両方を教えておりますので中学生にせつかく本校におられる佐藤先生の話の一回聞かせてあげたいと思ってお願いしたんです。佐藤先生快く引き受けてくださって生徒たちに1時間ずつお話していただきました。その時にまあそれは植物の話や歴史の話をしていただきました。

そういうお話をされた時、ちょっと佐藤先生間違えられたんですね。「あ間違えた間違えた」と言われたら、中学校の生徒が「佐藤先生かわいーい」と大きな声で言ったんですね。私は「あ、どうしよう、えらいことになった」と慌てました。そしたら案外佐藤先生まんざらでもないように、にこにこされていました。いつもでしたらそれは厳しいことをを言われますのに、晩年には普通のおじいさまのお顔になられていました。

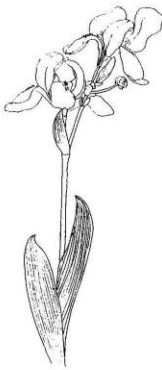
それから次ですね。これをちょっとをご覧になって下さい。（ニワゼキショウを袋から出す）これは先生がご退職になりました後、ご自宅におじゃまさせていただいたときの事です。お邪魔する時、大抵あの庭まで送ってくださるんですよ。

ところがね、ある時これ（ニワゼキショウ）を持ってこられましてな、こういうことを言われたんですよ。私にとっては大ショックでした。庭で取られた、ニワゼキショウを持って、「ちょっと渡辺君、なんとこれは、どういう名前だったかな」と言われて、わたしもビックリしましてね。佐藤大先生ですよ、私が言うならなら分かりますよ。どういう意味なのか私はわからなかったんです。ひょっとしたら私がこれを忘れとるかどうかテストされたのかなあと思ったんです。

実際すぐには出て来なかったらしいんです。そしてまあ、ど忘れというんですか一時的に忘れられたんでしょう。

### ニオイイリス・ニワゼキショウ

ニオイイリス（あやめ科）



ニオイイリス

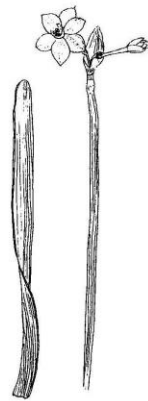
花壇用アイリスとしてよく栽培される。葉は剣状で花は白色。イチハツと間違えてよばれることがあるが、イチハツはやや小さい紫色花をつける別種である。

ニワゼキショウ

4～6月ごろ可愛い花をつける。花の色は白色のものと淡紅紫色のものがあり、紫色のすじがある。茎の高さは10～20cm。

### スイセン・ヒヤシンス

スイセン（ひがなばな科）



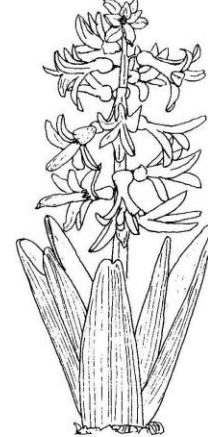
スイセン

12月～3月ごろ白色花をつける。スイセンの花には中央部に黄色のさかずき形のものがついている。これは副花冠とよばれる。キズイセンやラッパズイセンなど類似植物が多い。

ヒヤシンス

鑑賞用に栽培される多年草。花は青紫色で春に開花。園芸品種には紅色、黄色など多くの色がある。

ヒヤシンス（ゆり科）



## ニワゼキショウ（前掲書から）

私は「えっあのニワゼキショウじゃなかったですかねえ」と言いましたら、「あっそうだそう。ニワゼキショウだった。」と言われて、そこは収まったんですが。

その時先生がこういうことを言われました。「自分も色々植物やってきたけど、これから先、こういうふうに植物の名前が出てこないことがあるかもしれない。だんだんそれが増えてくるかもしれない。そうなった時、それはおそらくわからなかったら図鑑を引くじゃろう、図鑑を調べるじゃろう。その時に大きな図鑑を見る元気はない。だから身近にある、もうようけはいらん150ほど（草の種類が）あればええから、草の中で類似種と比べたようなミニ図鑑を私のために作ってくれんか。」と言われてたんですよ、私に。びっくりしましてね。ただそこで「いやよう作りません」というような雰囲気ではなかったですね。もう御断りも出来ません、それは。「それでそれじゃあやらさせていただきます」そう言ってね。返事をして作り始めたんです。どうしよう、先生のですから先生の目に留まるようなものを集めなきゃいけませんな。

そこで私はとりあえず1年間はということで、絶対あることが分かっているものはスケッチを開始しました。それから調査をしないと分かりませんから、里庄町のこの辺にお邪魔をして、私はここへ10回近く来させていただきました。1年間春夏秋冬見ないとわかりません。冬にはあるけど、夏にないのもあります逆もあります。それを一生懸命メモっていきました。

そしたらあるとき夕方でしたか、私は車だったら邪魔になりますから、バイクで来てそれを道に置いていくんですけど、夕方ねある時にお巡りさんに呼び止められてね。

(巡) 「あんたここで何をしよんな」

(渡) 「いや実はこういうわけで図鑑を作ってるんですよ」

(巡) 「図鑑なら買やあ売りょうりますがな」を言われましてね。

それで「運転免許書を見せ」言われたり、「所属長の名前を言え」とかね、なんだかんだ言ってねー、いろいろ聞かれましたね。最後に「よその家を覗きなさんなよ」といって帰って行かれましたけど。職務熱心ですなあ、里庄のお巡りさんはね。

まあ、そういうようなことです。それで一生懸命で作ったんですけど、ほかの仕事で忙しくなりましたな、どうしても1年その作業を休まなきゃいけないことが起きてしまったんです。残念ながらその間に佐藤先生がお亡くなりになってしまったんです。

ですから原稿の段階では先生に見てもらったんですけど、それを使って先生に色々使っていただくことはできませんでした。それでもせっかく、先生が言われている図鑑を活用するなんかいい方法はないだろうかという事を考えました。そして、生徒用に使えないかなと思ひまして、生徒だって最初からそんな大きい図鑑は嫌でしょうから。文章も生徒用に書きかえて作りました。こういう本



にしました。ああコレ全部スケッチしました。

佐藤先生ならすぐに一晩でいくらか描かれましようけどね。私は、図が下手なんで、そうでなくてもね、一つ描くのに3日も4日もかかるようなこともあったりしましたね。とりあえず作ってそれを中学校の授業に使いました。まあこれで佐藤先生にはお許しを頂くしかなかったです。

色々とりとめのないことを申し上げてしまいましたね。お時間がきました。この辺で。これからもこちらの方でご研究ができて佐藤先生のことが明らかになることを楽しみにしています。今日はありがとうございました。[拍手]

---

アーカイブス 2 「岡山民俗 174 号」(昭和 62 年 7 月)より転載

## 桂氏を追憶して

佐藤清明

昨年十月、桂氏は八十五歳の天寿を全うして長逝された。丁度、その前の六月に陶友会で発行された「桂又三郎」によると、桂氏の著述は昭和二年に始まって昭和五十八年までに二百十六冊に及んで、その詳細が本書二百五十七ページにわたって詳述されている。八十年の生涯、二百五十余冊の著述編纂をした人が、私達の周りに果たして今までに誰があったであろうか。

昭和四年、「岡山文化資料」第五号に「植物の方言と訛語」の一文を載せて貰ったのが最初で、私は不思議なご縁で同誌を中心にして友情を蒙り、当時の桂氏は二十八歳、私は二十四歳、もひとつ上に嶋村知章氏が三十三歳で、岡山の東山へ行く途中の門田屋敷の桂氏の家が語り場で、私は当時六高の助手をつとめて、同じ門田屋敷の桂氏宅の近くに二階の一室を借って住み、嶋村氏は郊外の東川原から出て来て、三人はたいてい二、三日ごとに語り合っていた。

嶋村氏は慶応の理財科を出て北海道で三井物産に勤めていたが病気で帰郷、当時の二年前から桂氏と知り合って、民俗学の興味を持ち込んだ。昭和五年には岡山県で大演習が予定され、陛下のご来県の準備として、ご興味をもたれる生物を調査しておこうと、香坂昌康知事の発意で、岡山県生物採集動員が県下の学校で一斉に行われ、私はこの挙に参加させられ、生物採集を指導して回りつつ、生物の方言民俗に自然と興味を持つようになり、これが偶然に桂氏と一致して、岡山文化資料に一端を発表させてもらい、またそれが縁となって、南方熊楠、柳田国男の両氏からも可愛がられた。

その後、桂氏は門田屋敷を払って城下に移り文献書房を経営、私も内山下の石山に小居を持ち、近所の気軽さ通りがかりでほとんど毎日のように語り合った。当時、嶋村氏は世を去り、文献書房で雑談の花を咲かせた面々には、岡長平、郡山辰己、野田実、正宗敦夫、金重陶陽

等の諸氏があった。昭和二十年に戦災にかかって文献書房も焼け、桂氏は金重陶陽氏に引張られて伊部に入り、遂に備前焼の大御所になり、私も焼けて郷里の里庄に帰って県の文化財調査に転じたが、若き日の文献書房と「文化資料」の思い出はつきない。八十年の生涯、二百余冊の著作!!…… この桂氏の限りない熱意の一端でもあやかりたく、追悼号の隅に、拙文をのせて戴くことを希った次第である

---

アーカイブス 3 「叙勲かかる功績調書本文」( S.55.11.3. 勲五等 双光旭日章受章 )

## 功 績 調 書

氏名 佐 藤 清 明 (七十五才)

右は、明治三十八年浅口郡里庄町に生まれ、金光中学校卒業後、文部省中等学校検定(博物科)に合格し、昭和六年より清心高等女学校教諭(現在は講師)及び昭和三十三年から岡山大学農学部講師として現在に至っている。

この間、昭和二十三年から岡山県国宝重要美術史蹟名勝天然記念物調査委員(現、岡山県文化財保護審議会委員)として、天然記念物を中心とする文化財をはじめ、広く自然保護活動を続けている。

同氏の植物学研究は、青年期に第六高等学校生物学教室に勤務したことが契機となり発足し、その後、明治、大正期に、本県植物学の発展に貢献した高梁市の吉野善介氏、岡山県立高松農学校教諭の二階重楼氏、新見市の赤木敏太郎氏等、郷土の先駆者の指導をうけ、植物学の基礎づくりが確立された。

そして、独自の道を歩むとともに、従来、恣意的に解釈されていた記念木の樹令等について独善を避けるため、当時の植物学の世界的権威者である牧野富太郎博士をはじめ、堀川芳雄、川村多実二、岸田久吉、小泉憲治等の諸氏に師事し、その研究の方向を定めつつより科学性の高いものとした。

同氏の研究は、フィールド(野外)研究が主体であり、自らの足で山野を歩き、豊富な知識と正確な目で調査を行うもので、一本の木にしても地質の特徴から、目通り、根廻り、樹高、枝張り等を正確に測定し、豊富で詳細なデータから、推定樹令を割出すといった方法で県下の記念木等を科学的方法で体系化した。

こうした、広範囲にわたる調査活動を土台とした博識でもって、県下の天然記念物の指定審査を行うとともに枯損の状態を正確に把握し、適切な保護保存策を指導した。

戦後、記念木等が乱伐の危機にあった時、一連の県指定等の推進によって、今日、保存されている記念木は数多くある。こうした一連の指定物件は、国指定天然記念物の鯉ヶ窪湿生植物群落をはじめ、動物関係の川真珠貝、金螢など、植物関係は黄金杉、阿知の藤、住吉島の樹林など、地質関係では浪形岩、八町堰準平原面など三十件で、旧制度指定を加えると百件を超えるものである。既に消失、枯損したものもあるが、県北の真庭、苫田、勝田、各郡を中心に全县に及んで



いる。

こうした活動の過程において、植物新種の発見も、サトウタマヤスデ（昭和四年、高梁市）、ヨウジョウゴケ（昭和四年、岡山市）、サトウキノコバエ（昭和二十一年、大山）、サトウリュウガヤスデ（昭和二十七年、阿哲台）等が記録されている。又、同氏の功績は、その著述活動において顕著にあらわれている。

昭和四十三年の岡山県現存植物図説明書（天然記念物緊急調査）をはじめとして、県市町村教委の要請を受けて開始した総合調査も昭和四十七年より現在にまで四市十四町に及び、それぞれ詳細な報告書を作成した。併せて、左のような著書を刊行した。

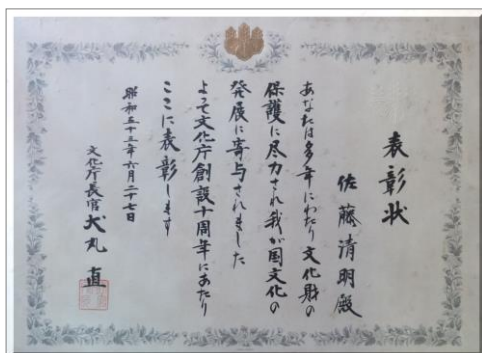
「博物学叢話」（昭和七年、東京文教書院）、「岡山県博物風土記」（昭和二十三年、岡山山陽新聞社）、「岡山県重要文化財図録、天然記念物編」（昭和三十四年、岡山文教出版社）、「岡山県の文化財」（分担執筆）（昭和四十五年、文化庁）

これ等一連の著書、報告書は膨大な量であり、これだけでも同氏の博物学にかけるなみなみならぬ熱意がうかがえるわけであるが、量にも増してユニークなのは、その内容である。

すなわち、同氏の記述は、対象物の世に出た由来から説きおこし、その実物の輪郭を紹介するとともに、県下における分布状態や類似品との識別を項目に分けて解明し、従来の定説に加えて新事実を附記するものであり、詳細にして平易な表現は、専門家のための学術書としても、また、博物学を研究する後進のための参考書として、高く評価されている。

このように、戦前戦後を通じて五十年の長きにわたり、博物学研究一筋の道を歩み、岡山県はもとより我国の文化財保護保存における貢献は、はかりしれないものがある。

功績調書文面は、渡辺義行氏所蔵の控による。



他に、

- 文化庁創設10周年記念表彰（文化財保護）
- 岡山県知事表彰（私学教育振興）
- 山陽新聞賞（学術功労）
- 全国私立中学高等学校連合会私立学校法制定30周年記念表彰（私学教育充実発展）

等



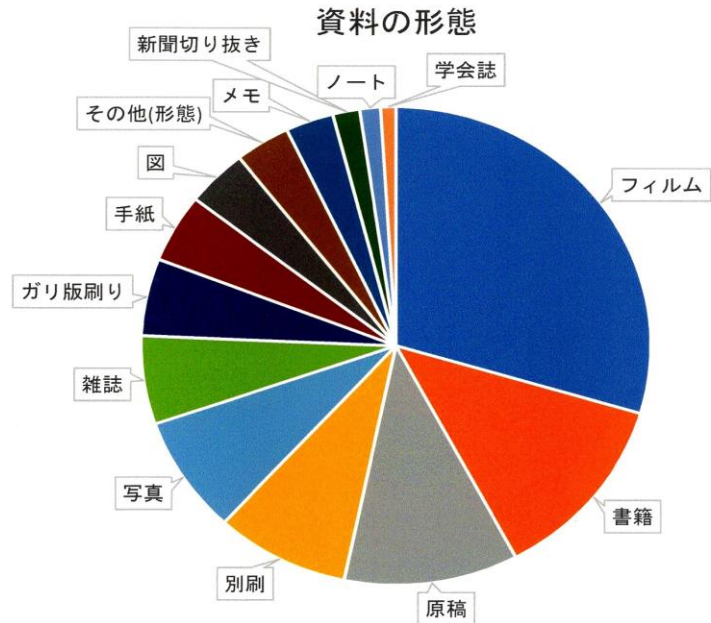
# 佐藤清明資料の整理状況

2019. 3. 21. 現在

佐藤家から搬出した資料の撮影は、ほぼ終了した。入力済み資料総点数 650 点（紙媒体 407 点・写真フィルム 243 点）、画像ファイル数にして約 4000 枚となった。

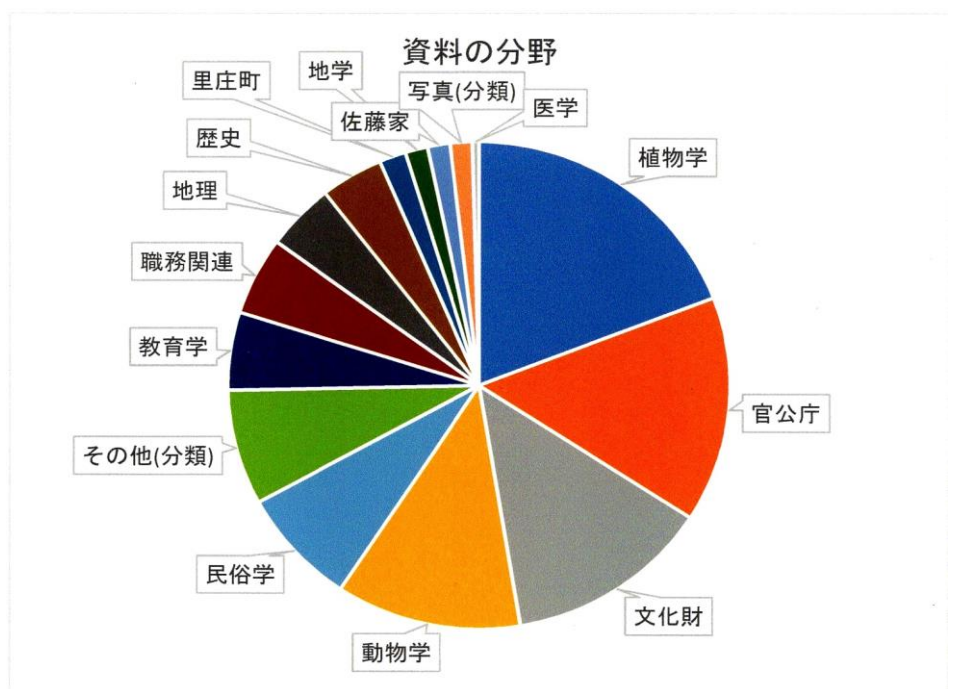
資料の形態

フィルム	243
書籍	104
原稿	91
原稿	70
写真	65
雑誌	49
ガリ版刷り	43
手紙	38
図	32
その他(形態)	29
メモ	25
新聞切り抜き	14
ノート	11
学会誌	8

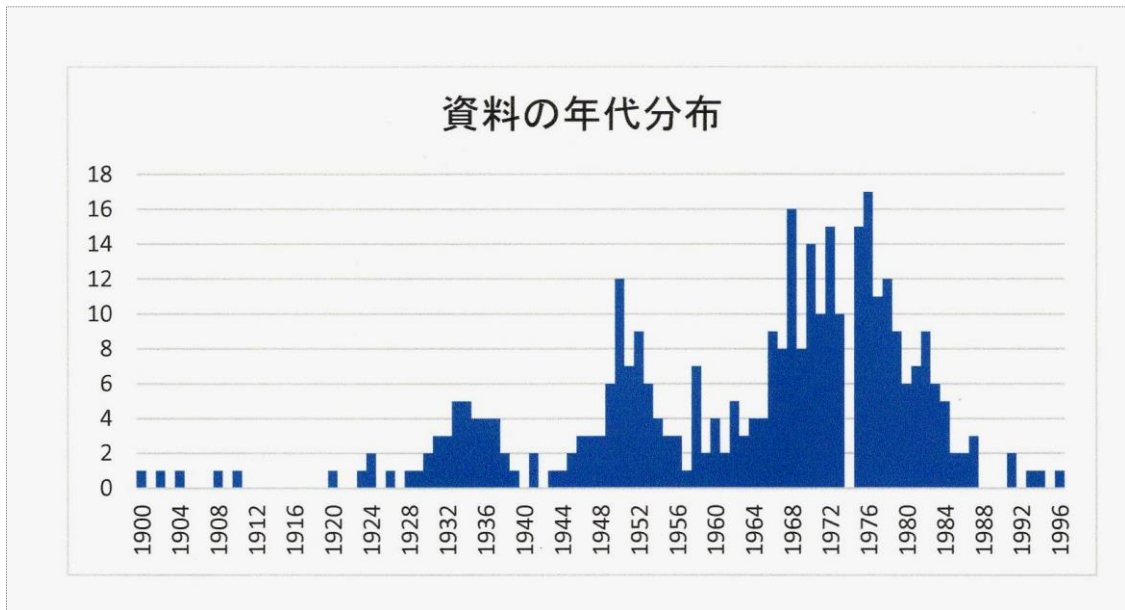


資料の分野

植物学	133
官公庁	104
文化財	92
動物学	83
民俗学	54
その他(分類)	53
教育学	36
職務関連	36
地理	31
歴史	28
里庄町	12
地学	10
佐藤家	10
写真(分類)	10
医学	3
化学	0



資料の年代分布



資料の整理と撮影は、顧問各位にもご参加いただいて取りかかり、軌道に乗った段階で、町内在住の会員が引き継ぎ、この度、当面の作業を終えることができた。現在、写真フィルムのスキャニングを含めて伊藤智行氏（理事）の手でデータベース化が進められている。当然ながら、資料の撮影・入力・データベース化は、資料を積極的に活用するための過程である。膨大な資料の活用は、検索しやすいデータベースの構築が前提となるので、今後も継続して追記、修正等を行い、利便性を高めてゆく必要がある。

資料の内、2点以上の著作者は、佐藤清明 257・岡山県企画部土地対策課 7・安江安宣 5・日本鳥類保護連盟 3・植物手帳の会 3・桂又三郎 3・岡山民俗学会 3・岡山樹と草の会 3・岡山県緑化推進委員会 3・岡山県人社 3・岡山県広報協会 3・日本鳥類保護連盟岡山県支部 2・土屋圭示 2・倉敷昆虫同好会 2・三宅一喜 2・岡山博物同好会備西支部 2・岡山樹と草の会 2 であった。

### <編集後記>

会報第2号をお届けいたします。現在進めている佐藤清明資料の撮影は、正確を要するルーチンワークです。完成後のデータベースの信頼性が損なわれてはならないので緊張が続きますが、その中での楽しみは今まで知らなかった世界との出会いです。担当した方々の道草ともいえる取組から、思いも掛けない展開を見るという嬉しい出来事がありました。佐藤清明がスタンフォード大学のスケネク博士と交わした英文の一連の手紙はその一例です。封筒に見えた GHQ の文字に引かれて文面を撮影したとのことでしたが、顧問の方々の手で、佐藤邸の書庫で静かに眠っていた貝類の標本とその手紙が繋がり、思いがけない展開となりました。やがて、関わって下さった方々から、ご報告が頂けるのではないかと心待ちにいたしております。

また、清明を読む会などでも貴重なご発表が続いておりますので、可能な限り記録の蓄積に努めて参りたいと存じます。よろしく願いいたします。 (会報担当理事 佐藤泰徳)



佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No. 2

発行日 平成 31 年 3 月 31 日  
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館  
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 中尾茂男  
住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621  
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.sl-net.town.satosho.okayama.jp>  
E メール : slnet@sl-net.town.satosho.okayama.jp